

## 研究論文

## 博覧会における異文化接触と娯楽性についての研究動向

## Recent Research Trends in Intercultural Contacts and Entertainment at Expositions

五月女 賢司

Kenji Saotome

和歌山大学大学院観光学研究科博士後期課程

キーワード：博覧会、人類学展示、異文化接触、娯楽性、連続性

Key Words : expositions, ethnological expositions, intercultural contacts, entertainment, continuity

## Abstract :

The aim of this paper is to review the recent research trends in intercultural contacts at international expositions and how they were associated with entertainment and tourism.

There is no previous work on expositions that reviews the evolution on exposition tourism focusing on intercultural contacts from the modern to the contemporary era. In fact, the majority of works on expositions are either period-specific, exposition-specific, discipline-specific, or broad-based studies of the history of expositions as a whole.

In this paper, therefore, books and papers on expositions from the second half of the nineteenth century onwards, from modern expositions with ethnological displays to the transformation to more contemporary one at the Expo 1970 Osaka, which gave more focus to tourism with intercultural contacts and interactions in the exposition setting, are reviewed. This will be followed by a review of some notable historical accounts, books and papers from the beginning of Meiji period onwards as an exposition research in Japan.

## I. はじめに

19世紀後半以降の多くの博覧会では、「展示される側」の人々に対する、「展示をする側」の人々からの配慮や倫理観に欠ける人類学展示（あるいは、「人間展示」や「人間動物園」などといわれることもある）が、植民地支配の正当化のほか、「学術」とされる営為や見世物（娯楽・余興）などの目的で開催されてきたといわれている。これらは基本的にいずれも、政治的、経済的、文化的に優位な立場にある欧米諸国や日本の博覧会関係者が植民地支配をするなどしていた地域の人々を、配慮や倫理観の面で自覚的あるいは無自覚的問わず、博覧会において一般来場者向けに展示し、楽しませていたという意味で、現在の「観光」の定義に照らせば、来場者にとっては移動を伴う非日常生活圏における異文化接触や娯楽の体験、すなわち観光行動であったといえる。

観光は、観光客と「ホストが出会うことによって、互いが異なる文化を認識する機会として、国際平和と理解あるいは文化交流促進のため、国際機関によって推奨されてきた」（安福, 2000: p.98）。一方で、観光は『「新・植民地主義」や『「新・帝国主義」などと呼ばれるように、ホスト社会に与えるその負

の社会的・文化的インパクトが指摘され」（安福, 2000: p.98）であり、異文化接触や娯楽を伴う博覧会観光の議論とも無縁ではない。

一方、博覧会、特に国際博覧会（以下、「万博」という）は現在、「自国に特有であると思われる文化的な活動について国の誇りを示すようなテーマが設定され」（アーリ&ラースン, 2014: p.206）であり、「それらは世界観光の一種のミニ版」（アーリ&ラースン, 2014: p.207）として機能している。

以上のような、博覧会における異文化接触と娯楽性についての歴史的背景や議論がありながら、これまでの博覧会研究には、近代から現代、特に1970年の日本万国博覧会（以下、「1970年大阪万博」という）に至る異文化接触を伴う博覧会観光のあり方の変遷や文献の有無をレビューしたものは存在せず、その多くが時代別、博覧会別、学問分野別の論考または博覧会の歴史全体という幅広い領域を概観した研究となっている。

そこで本稿は、主に日本が参加した博覧会と日本が開催した博覧会に焦点を当てた、主に社会史的アプローチによる文献のレビューを行う。博覧会研究の射程は非常に幅広く、国

内外で開催された万博から国内博覧会まで、また歴史学分野に限っても社会史のみならず、建築史、美術史、産業技術史、科学史、経済史など、幅広い領域において博覧会が論じられている。一方、日本が開催した1970年大阪万博は、テーマ重視型の万博として、「人類の進歩と調和」というテーマのうち、「進歩」のみならず「調和」をも重視する万博であったが、このようなテーマ重視型の万博に至る万博の歴史の変遷についての先行研究は皆無に等しい。そこで本稿は、主に19世紀後半から、急速に独立国が増えていった1970年大阪万博開催までの時代区分の中で、旧植民地諸国がより対等な立場から万博に参加し異文化交流を促進することをめざすことになるまでの歴史の変遷を辿ることを目的とする。また、近代博覧会における人類学展示の歴史から、より対等な立場からの協調的・調和的な異文化交流をめざす博覧会に向かっていった戦後の現代博覧会、特に1970年大阪万博への連続性・非連続性についての文献の有無を確認することを、もう一つの目的としている。そのため、先述の通り、主に日本が参加した博覧会と日本が開催した博覧会に焦点を当て、1970年大阪万博に至る社会史的アプローチによる文献のレビューにより、一連の変遷の一端を整理し、明らかにすることとしたい。その意味で、本稿は近代の人類学展示をはじめとする異文化接触の歴史研究を追い、戦後の現代博覧会についての研究まで同時にレビューを行うことで、これまでさほど研究対象とはみなされなかった戦後の現代博覧会における異文化接触を伴う観光のあり方を問うための基礎的な文献研究としたい。

ところで、先行研究についてのレビューを行う前に、以下、異文化接触を伴う博覧会についての歴史を概観しておく。

博覧会の来場者にとって異文化接触を伴う博覧会体験は、博覧会、特に万博が元来、国威発揚や科学技術振興を目的としてきたことと表裏の関係といえる。つまり、世界や社会の縮図として演出された博覧会場において、「進歩した西洋」を表象し、その対として「野蛮あるいは未開の非西洋」や「発展させるべき対象としての非西洋」を表象することは、西洋諸国が国力や植民地を維持し、そうした世界の構図が不変のものであるというイメージを生産し、再生産し続けるためには、必要不可欠な要素だと考えられていたのである。しかし、近年はそのような帝国主義的・植民地主義的とされる立場に対する批判的な議論が一般的である。また、科学技術振興などを目的とした博覧会は、次第に博覧会への来場者数や博覧会を開催することの直接的利益を追求する方向などへとその目的をシフトしていった。そうした一連の過程で、博覧会の娯楽性がより強まり、遊具や踊り・芝居などの余興を充実させ、また、娯楽・余興の一つとしての意味づけがなされることもある人類学展示という異文化表象をすることで来場者を楽しませる方向へと、その性格が変容していくこととなる。

時代がぐだり、戦後最初の大規模な万博として1958年に

ベルギーでブリュッセル万博が開催された。この万博は、「人間性の再生」を提唱しテーマを重視する潮流を作ったものの、会場内で植民地支配するベルギー領コンゴの人々を、政治的・経済的・文化的な支配者／被支配者といった上下関係が存在するという非主体的実態のもとに展示したという意味で、テーマ重視型万博の限界を露呈した。

その後開催された2つの万博、すなわち1967年のモントリオール万博と1970年大阪万博は、戦後多くの植民地が独立をしていたという国際政治上の変化も相まって、テーマ重視型の万博作りをより忠実に遂行することで、独立した多くの旧植民地諸国に、より対等な立場をめざした姿勢からの参加を得ることができた。こうした1960年代以降の博覧会、特に万博は、娯楽性は残しつつ、それまでにはなかった、より対等な関係をめざした形での異文化接触を伴う交流活動を行うことが可能な場へと変容していったのである。なお、来場者が博覧会に赴き、諸外国の人々やその文化に接する行為であったという意味で、1960年代以降の博覧会訪問も、移動を伴う非日常生活圏における異文化接触や娯楽の体験であることに変わりはなく、現在の「観光」の定義に照らして、観光行動であったといえる。

こうした異文化接触を伴う博覧会についての歴史的背景を踏まえ、本稿では、まず第2章で19世紀後半以降に人類学展示を行った近代博覧会についての先行研究について検討したい。その後、第3章では日本の博覧会研究前史として明治以降のいくつかの特筆すべき歴史的記述をレビューし、第4章で1970年までの博覧会についての論考を中心に検討することとしたい。本レビューでは、全体として博覧会という舞台における異文化接触と娯楽性、すなわち観光行動に焦点を当て、その研究動向、もしくはその研究の有無を確認することとする。

## II. 博覧会における異文化接触及び娯楽性についての先行研究

まず本章では、博覧会という場における異文化接触と博覧会の娯楽性について、国内外の先行研究をレビューする。また、レビューの過程でいくつかの博覧会事例を取り上げる。複数の文献でも言及がある通り、その多くがエドワード W. サイドによるオリエンタリズム批判を基礎とした帝国主義・植民地主義に対する批判的研究である（サイド、1993）。

政治的、経済的、文化的な支配者／被支配者などの上下関係を前提とした他者表象や人類学展示は、博覧会という場に限って行われてきたわけではない。

本章が主題とする博覧会における異文化接触や娯楽性と密接に関連する人類学展示について、非ヨーロッパ世界の産物がヨーロッパの文脈に取り込まれていく過程を歴史的に跡づけた上で、展示の実践的な場としてのミュージアムという制度に焦点を当ててその政治性を批判的に検討しつつ、表象の

対象である文化に属する人々の参画を得て行われる異文化展示の共同作業の模索にまで踏み込んだ優れた研究としては、吉田憲司（1999）による著作が挙げられる。

吉田（1999）によれば、目に見える世界を分類し、整理しつつそうとする博物学の衝動は、18世紀後半から19世紀前半というヨーロッパ諸国による植民地進出の活発化の時期を迎え、ヨーロッパに大量に流入しはじめた「異文化」の人間に対しても向けられたが、そこには、自己と他者、西洋と非西洋とのあいだの根深い区別が刻印されていた（吉田, 1999: pp.28-29）。例えばリンネは、人類（ホモ・サピエンス）のうちに、「ヨーロッパ人」や「アメリカ人」や「アジア人」、「アフリカ人」と並んで、「野生人」（ホモ・フェルス）や「奇形人」（ホモ・モンストゥロス）を含めているほか、ヨーロッパ人は「白い肌、多血質、知性的」、アメリカ人は「赤い肌、肝汁質、頑固」、アジア人種は「黄色い肌、黒肝質、剛直」、アフリカ人は「黒い肌、粘液質、怠惰」（吉田, 1999: p.29）といったように想像的な要素が多分に紛れ込んでおり、人種の序列化の志向が存在していた。同時代のこうした思潮の犠牲になった人物として、吉田はサーチェを紹介している。サーチェは、1810年に南アフリカからキリンの皮とセットにされてロンドンに連れて来られた「 hottentot 」の女性である。「 hottentot 」は、当時、存在の連鎖における人と類人猿との間の「欠けた環」（ミッシング・リンク）を埋めるものとして動物学者の注目を集めていた。ピカデリーで見世物小屋にかけられた彼女は、その大きな脂臀によって大衆の関心と呼び、「 hottentot ・ヴィーナス」（吉田, 1999: p.30）として一世を風靡した。

このように、吉田はヨーロッパを頂点として世界を分類し、序列化する動きについて、「社会進化論の登場を待つまでもなく、18世紀を通じて着実に進行していた」（吉田, 1999: pp.29-30）と論じるなど、社会進化論的な思考に基づく当時の異文化表象のあり方を批判的に検討している。

一方、博覧会という場における人類学展示は、19世紀後半以降の欧米において数多く行われてきた。例えば、1878年と1889年にフランスで開催されたパリ万博では、黒人村（village nègre）というパビリオンが建設されたほか、1900年に同じくフランスで開催されたパリ万博ではマダガスカル集落が再現され、そこで人類学展示が行なわれた。これらはほんのわずかな例であり、博覧会という場における人類学展示は、さまざまな社会背景や時代性のもと、20世紀半ばまで数多く実施されてきた。

近年は、博覧会における人類学展示及びその娯楽性など、異文化接触にまつわる博覧会研究が質・量共に充実してきている。

まず、万博と帝国主義・人種差別についての関係を明らかにした先駆的研究として、Rydel（1984）による著作が挙げられる。

Rydel は、エリート層から大衆層への思想の伝播を検証す

る本書の中で、米国人が万博を通じて目を見張るような技術革新、優美な芸術や建築、大衆娯楽にとどまらず、科学的裏付けに基づくとされた人種差別や帝国主義の概念に触れている。1876年フィラデルフィア万博、1893年シカゴ万博、1904年セントルイス万博など、1876年から1916年の間に米国で開催された12の万博について横断的に検証し、人類学展示や商業的な「ミッドウェイ」アトラクション、さらには外国政府の展示に登場する非白人イメージに焦点を当て、万博は文化、特に大衆文化を形成することを目的としていたと論じている。すなわち、万博に参加した米国の白人は、「野蛮」から「文明」までの距離を測る基準を得ることができたとしているのである。

また、Rydel は、科学と商業、教育と娯楽が万博の中で融合していく様子を描いている。19世紀末にかけ万博は、スミソニアン科学館や大学の教授たちと協力して、外国の人的資源や自然資源を一般の人々に紹介する展示を行った。しかし、このような科学的な権威を背景にした展示物は、世紀末になると、「ミッドウェイ」で大衆の娯楽のために企業家たちが準備した生身の人間を展示する「民族村」とほとんど区別がつかなくなってしまったと説く。Rydel によると、例えば、1876年フィラデルフィア万博の企画者は、道徳性が高く厳粛だとされる人類学展示を、博覧会の場外会場にある、フィジーの「人食い人種」やボルネオの「野生人」などの商業展示からの切り離しに成功していた（Rydel, 1984: pp.33-35, 筆者訳）。しかし、1904年セントルイス万博会場内の連邦政府主催「フィリピン保留地」は、フィラデルフィアの商業博物館を指揮していた元ペンシルバニア大学の生物学者 William Powell Wilson が集めた物や人で構成され、全米の遊園地を巡回していた商業的な「フィリピン・ヴィレッジ」となら変わらない展示となっていたという（Rydel, 1984: pp.167-173, 筆者訳）。

Rydel は、万博がエリートの「文化的覇権」を社会に拡大することに成功したと結論づけている。エリートの人種的・帝國的イデオロギーは、「教育」と「娯楽」の機能の中に織り込まれ、万博の来場者には客観的な現実として映し出されたと論じる。Rydel は、万博が「米国の知識人、政治家、そしてビジネスリーダーたちが、自らの優先事項についてのコンセンサスを得、自らの人種的優位性と経済成長という進歩のビジョンを確立するための努力を反映していた」（Rydel, 1984: p.8, 筆者訳）とする。さらに Rydel は、万博における人類学展示の背後には、企業中心の資本主義をさらに浸透させるために、大衆をなだめ、コントロール化に置くための構造化されたイデオロギーがあったとするほか、万博の娯楽区域についても、「あらゆる場面で階級間の対立に脅かされていた上流階級が、大衆文化に影響を与えようとする努力の高まりを反映していた」（Rydel, 1984: p.236, 筆者訳）とし、当時の万博における人類学展示のあり方を批判的に論じている。



一方、Ryde11が検証した万博における帝国主義や人種差別の表出については、その社会に対する影響や、万博という媒体の外の、広い社会における帝国主義的、人種差別的な営為との違いが明確に示されていない。また、人類学展示が20世紀前半にかけて減少していったのは、社会における人種差別への意識の変化の結果なのか、それとも大衆に「エキゾチックなもの」を提供するという点で映画などの大衆向け媒体に対抗できなかったからなのか、という疑問も残る。とはいえ、本書がエリート文化と大衆文化が出会う場としての万博に限定して検証することは当初からの研究目的であり、その意味で思想の社会史、特に人種差別の社会史における優れた研究といえる。12の博覧会をまとめて分析することで、Ryde11はこれまで断片的だった現象に一貫性をもたらし、エリートの表現がどのように大衆の態度を形成するかという問題を提起した。

なお、帝国主義のあらゆる側面に焦点を当て、社会進化論に基づき構成された博覧会展示についても痛烈な批判と共に論じる研究には、Ryde11 (1984) のほかにも同年に刊行された MacKenzie (1984) による著作がある。

また、異文化接触やその娯楽性にまつわる博覧会研究については、Greenhalgh (1988) による著作がある。

博覧会の歴史研究は、1980年代まで博覧会やその歴史を肯定的に捉える祝賀的な側面を強調する出版物が相対的に多かった。最新の博覧会開催に合わせた出版物も多く、熱狂的にこれを盛り上げ、持ち上げる内容となっており、これらは必ずしも学術的とはいえない。Greenhalgh は、帝国主義、植民地主義、人種差別、労働者の搾取などが、これらの博覧会や博覧会関連出版物の中で粉飾されていることを、批判的に論じている。Greenhalgh は、万博や植民地博覧会などが帝国主義推進の手段として利用されていたと論じており、その主な論点は「先住民の村」の展示を調査し、非難する「Human showcases」の章 (Greenhalgh, 1988: 82-111) で論述されている。しかし、博覧会参加各国はスイスのシャレー、米国の丸太小屋、日本の庭園などで、それぞれ独自に生身の人間を展示し、展示された人々がそれぞれの役割を演じることで、来場者を楽しませたり、啓発したりしており、それらと Greenhalgh が主張するところの帝国主義的、植民地主義的であるという人類学展示との違いは明確に説明されていない。

異文化接触にまつわる博覧会研究については、モルトン (2002) による著作も興味深い論考となっている。

モルトンは、社会進化論に対する批判的な立場からパリ植民地博覧会を考察しており、「フランスが行なったこの博覧会の目的は、植民地と西欧が一体となって植民地世界の秩序を継承していく政策を啓蒙することにあった」(モルトン, 2002: p.9) として、「『劣等な人種』を改善するには2つの方法しかない。教育か、あるいは『優秀な人種』との異種交配である」(モルトン, 2002: p.177) という James Clifford の言葉を紹介しつつ植民地主義的な人類学展示を痛烈に批判している。

次に、19世紀後半のレオポルド2世から20世紀半ばまでのベルギーによるコンゴ統治を対象とした研究で、戦後の1958年のブリュッセル万博におけるベルギー領コンゴの人々の展示についても詳述した帝国主義批判の研究としては、Stanard (2011) による著作が挙げられる。

本書は、1908年以前に植民地を私有地として運営していたベルギーのレオポルド2世と1930年代の神格化に言及しつつ、主に1920年代から1950年代に焦点を当て、帝国主義の温存とレオポルド2世の神格化の存続について批判的に検討している。MacKenzie (1984) に倣い、Stanard は約半世紀にわたる国家主導の親帝国主義的なプロパガンダについて豊富な事例と共に紹介している。

そのうち、1958年のブリュッセル万博においてベルギー領コンゴから連れてきた人々を展示した人類学展示については、その期間や動員された人々の職業のほか、「先住民ヴィレッジ (village indigène)」などと呼ばれた区域で、一部コンゴの人々を柵の中で生活させ、来場者に観覧させたことなどを、以下の事例との比較を通して批判的に詳述している。すなわち、同会場における「ハワイアン・ヴィレッジ」や「ハッピーベルギー」などとの違い——例えば、「ハッピーベルギー」などが会場に建設された複数の建造物からなる人工的な街の中で、来場者が過去の衣装を身にまとったコンパニオンが対応するイベントにも参加し、楽しむものであったのに対し、コンゴの「先住民ヴィレッジ」は単に柵の中に展示されたコンゴの人々を来場者が観覧するものであった、という違い (Stanard, 2011: p.70) ——を検討する視点からの記述である。Stanard (2011) によると、「先住民ヴィレッジ」では、コンゴの人々に対する来場者からの扱いがあまりにひどく、コンゴの人々が会期中の7月には帰国したという (Stanard, 2011: p.72)。

戦前から続くレオポルド2世の神格化とそれに伴うベルギーの人々の思考や行動様式が、戦後に至ってもなお博覧会という場の構成において、大きな影響を及ぼしていたことを Stanard は明らかにしたのである。

一方、国内での博覧会における人類学展示及びその娯楽性など、異文化接触や文化表象のあり方をめぐる博覧会研究とその刊行物は1990年代に始まり、2000年代以降にやや細分化しつつも、別の論点を加えて深まりをみせている。

必ずしも博覧会研究の範疇ではなく、むしろミュージアムにおける文化表象の問題に正面から取り組んだ研究としては、すでに吉田憲司 (1999) による著作について検討した。

一方、1851年以降の万博が消費文化の広告装置や大衆娯楽の見世物の役割を果たし、また帝国主義のプロパガンダ装置としての役割をも演じてきたとし、新興国日本の両義性についても着目して、近現代における「まなざし」と政治性をめぐり出す装置としての博覧会について検討した研究としては、吉見俊哉 (1992) による著作があり、博覧会を批判的に論じる際の重要な文献となっている。

吉見は、本書において博覧会を3つのテーマに分けた。すなわち、「帝国」のディスプレイ、「商品」のディスプレイ、「見世物」としての博覧会である。参照した博覧会は19世紀半ばから20世紀後半まで幅広く、「博覧会が、近代の大衆の感覚や欲望をどのように動員し、再編していったのか」（吉見, 1992: p.25）を明らかにしている。

3つのテーマのうちの1つ目、「帝国」のディスプレイでは、「博覧会が、近代国家にとって最大の祭典としてきわめて重要な意味をもった1851年から1940年までの間、この空間は、様々な仕方で繰り返し、帝国主義と植民地主義の巧妙で大規模な展示を行っていた」（吉見, 1992: p.22）として、1870年代以降の植民地主義的な展示、特に1880年代から1910年代まで顕著となった植民地パビリオンの建設や植民地の人間や植民地戦争での戦利品を展示した事実について、日本の事例にもページを割きつつ批判的に検討している。

2つ目の「商品」のディスプレイでは、「博覧会は、何よりも19世紀の大衆が、近代の商品世界に最初に出会った場所であった。まだ視覚情報メディアが圧倒的な力をもっておらず、情報の流通が空間的な場から完全には遊離していなかったこの時代、人々は、まず博覧会に出かけていくことで、近代の商品世界の何たるかを知ったのだ」（吉見, 1992: p.23）としつつ、「博覧会における商品世界の呈示が、前述した帝国主義の側面をはるかに凌駕するほど強調されてくるのは、1930年代以降の万国博においてである」（吉見, 1992: p.23）とも言及し、博覧会の多義性を論じる。国内においては、「大正から昭和にかけ、博覧会は様々な消費生活のモデルを呈示していくようになった」（吉見, 1992: p.23）として、住宅展示場の原型ともいえる大阪・箕面の桜ヶ丘住宅改造博覧会（1922年）や東京・上野公園の平和記念東京博覧会（1922年）などを紹介している。

3つ目の「見世物」としての博覧会では、「博覧会は、その発展史を通じ、近世都市で活躍してきた見世物師たちをみずからの演出機構の一部として取り込んできた」（吉見, 1992: pp.23-24）として、「資本主義の文化装置としての博覧会は、近世以来の見世物師たちの想像力を飼い慣らし、みずからの想像力の一部として取り込んでいくのだ。こうした傾向は、すでに1867年のパリ万博にも見られるが、それが顕著に表れるのは1880年代以降のことである」（吉見, 1992: p.24）として、1889年のパリ以降、それまで博覧会場から排除されていた見世物的要素が、意図的に展示の中に取り込まれていく様子を紹介している。例えば、1893年シカゴ万博における娯楽街「ミッドウェイ」や、一度は排除しようとした見世物性が再度流入した日本の明治以降の博覧会、特にこの兆候がはっきりと表れた例として、1903年に大阪・天王寺公園を主会場に開催された第5回内国勧業博覧会などである。しかし、1893年シカゴ万博の娯楽街「ミッドウェイ」でも第5回内国勧業博覧会でも、会場内外で植民地展示や人類学展示の類が開催さ

れ人気を博したが、これらについて吉見は必ずしも娯楽性の文脈では論じていない。とはいえ、日本では明治初期において見世物や娯楽の要素が強いと受け止められていた江戸時代の開帳と同一視される向きもあった博覧会に対する大衆のイメージを、明治政府が第1回内国勧業博覧会では文明開化や殖産興業のための催しとして見世物性や娯楽性を排除したことでその性格付けをしたこと、そしてそれにもかかわらず、第5回内国勧業博覧会以降は、むしろ積極的に見世物的な要素を取り入れていこうとする動きが現れてきた事に言及したことは（吉見, 1992: p.146）、博覧会における観光学研究の観点からも重要である。

本書では、1970年大阪万博についても多くのページを割いている。惜しむらくは、吉見が万博のテーマ設定の経緯について言及する中で、「進歩主義の所産である万国博を日本で開催することの重要性と、その際の知識人の役割が強調され、そのためには経済人との協力が不可欠であるとされていく」（吉見, 1992: p.223）ことを批判的に論じているが、これには多分に誤解も含まれている。1970年大阪万博を含む戦後の現代博覧会についての、特にテーマが重要視されるようになった背景やその経緯、さらに欧米や日本の人々から植民地支配をする地域の人々に対しての一方的な異文化接触が、双方向的な異文化交流になっていく過程について、研究の進展が望まれる。

このほか、博覧会における人類学展示及び娯楽性についての研究を時系列で紹介すると、松田京子『帝国の視線——博覧会と異文化表象』（吉川弘文館, 2003年）、山路勝彦『近代日本の植民地博覧会』（風響社, 2008年）、伊藤真実子『明治日本と万国博覧会』（吉川弘文館, 2008年）、國雄行『博覧会と明治の日本』（吉川弘文館, 2010年）、宮武公夫『海を渡ったアイヌ——先住民展示と二つの博覧会』（岩波書店, 2010年）、崔銀姫『「観光アイヌ」とは何か——まなざしの歴史的な変容をめぐる』（『社会情報学』第1巻2号, 2012年, pp.93-108）、小原真史『「人類館」の写真を読む』（『photographers' gallery press』no.14, 2019年, pp.3-55）などが、博覧会の政治性や文化表象の問題についての批判的論考となっており、特に2000年代以降の研究蓄積が著しい。

例えば、伊藤（2008）は、万博が、「これまでの研究から大きく3つの側面に分けることができる」とし、「第1に国家間の技術競争、第2に消費と娯楽、第3に帝国の支配を正当化する文化装置、ディスプレイ」（伊藤, 2008: p.1）という3分類を紹介している。そして、「第3の帝国主義、植民地主義との関係については、博覧会会場に植民地パビリオンが建設されたり、そこに現地の人を連れてきて見世物として展示した。これらはエキゾチズムを刺激する娯楽として万博で最も人気の高い施設であり、観客は会場内を周遊することで世界各地の周遊を疑似体験できた。このような娯楽施設は、



植民地化された国が未開であり、『われわれ』によって啓蒙される必要のある地域であるという支配の正当性を示す装置でもあった」(伊藤, 2008: p.2)として、一方で第3の「帝国の支配を正当化する文化装置、ディスプレイ」に分類しつつ、他方で博覧会における人類学展示として第2の「消費と娯楽」にも通じる娯楽の一つに位置づけた。伊藤はこの考えに沿い、1903年の第5回内国勸業博覧会における会場内の台湾館(日清戦争により日本の植民地となった)や、場外の学術人類館における人類学展示についても、当時の博覧会において「娯楽要素として不可欠なものであった」(伊藤, 2008: p.96)としている。

また、宮武(2010)は、「明治後期のアイヌの人々が、海を渡って西洋や日本という他者と初めて日常的に出会うことになった、20世紀初頭の巨大な博覧会」(宮武, 2010: p.5)の一つとして紹介する第5回内国勸業博覧会について、以下のように論述している。

政府公認の会場内ではなく、民間が主催する場外余興として設けられていた娯楽ゾーンでは、学術人類館と呼ばれる先住民の展示が設けられ、アイヌ、台湾、琉球、朝鮮、清国、インド、ジャワ、ベンガル、トルコ、アフリカの人々、計32名を展示し、多くの抗議や批判が寄せられた。当初、「学術人類館」は「学術」が付かない「人類館」という名称で開場する予定であったが、開催前からの批判・抗議に対応し、見世物風の「余興」ではなく、「学術」が目的の展示であると強調し批判をかわすために、名称変更された(宮武, 2010: pp.40-43)。

一方、「1910年の日英博覧会以降の国家主義とファシズムへ向かう時期には妥当するかもしれない」社会進化論の影響や諸民族統治の論理は、1903年の「第5回内国勸業博覧会」や翌年のセントルイス万博における人類学とアイヌの関係を考える際には一面的だろう(宮武, 2010: p.47)とする。つまり、すべての博覧会に社会進化論的発想が適用されていたわけではなく、社会進化論の影響や諸民族統治に対する批判は一部の博覧会、とりわけ1910年以前の博覧会では当てはまらないとしているのである。「むしろ、人類館の発起人であった西田正俊の興行としての企画に、当時の人類学会と人類学者が大衆への宣伝の機会として、思慮することなく賛同してしまったと考えるべき」(宮武, 2010: p.50)だという。1910年以前の博覧会における人類学展示に社会進化論は適用されないとする宮武の議論は吉田憲司(1999)らの議論とは相いれないものと考えられるが、とはいえ学術人類館の人類学展示は、伊藤の見解と同様、結局のところ大衆に向けての余興や娯楽としての側面が実は強い媒体であったとする部分については共通しているといえよう。

近年では、近代から現代に至る異文化接触を伴う博覧会観光のあり方の変遷や1970年大阪万博において異文化交流が推進されるに至った歴史的背景を検討する上で重要な研究

も一部でなされるようになってきている。

特に注目すべき論考は、佐野(2020)によるものである。佐野は、1851年に始まるとされ、現在に至る万博の歴史を、帝国主義や植民地主義が背景にあるとして批判的に論じられてきたこれまでの文献に対して、1928年に制定された国際博覧会条約に博覧会が取り上げうる分野の例として、「植民地の開発」を掲げている点に注目した上で、以下のように批判的に論じている。すなわち、「従来、過去の万博を研究するうえで、そこで行われてきた植民地に関する展示を批判することは、1つの重要な視角となってきた。その一方で、国際博覧会条約がこのように淡々と、それを展示対象の一例に掲げていたことには、注意が向けられてこなかった。(中略)〔条約名文家案出の〕その時点までの万博の実態を前提に、慣例を整理して良いところを残し、悪しきところを抑制するためのものであったと言える。植民地展示の例示についても、まずはその一環として理解しなければならない」(佐野, 2020: pp.17-18,〔 〕内は筆者による補注)とした上で、強調していたのは「現地の『非文明』ではなく、むしろ植民者たち自身がその経営努力の結果、いかに『文明』の持ち込みに成功し、本国と変わらない生活を送っているかを示すことであった」(佐野, 2020: p.18)と論じている。ただし、「その示し方が徐々に変化し、『開発』の対象であるところの現地社会や人々のありさまを、異文化に触れるおもしろみを含めて見せるようになっていく。周知のとおりそれがエスカレートし、生身の人間たちをつれてきて会場内で生活させ、来場者にその様子を見物させる『人間の展示』が行なわれるに至った」(佐野, 2020: p.18)としており、本稿でいうところの人類学展示に対しては、批判的姿勢を示している。一方、モルトン(2002)の帝国主義的展示への批判に言及しつつ、「ここで誤解を恐れずに繰り返すなら、当時の文脈において『植民地政策の現実的な状況や将来の可能性』を議論することは、『正当化』というよりも、時代下って現代の万博で『環境問題』『エネルギー政策』等々のテーマを掲げるのと同じぐらいに、国際社会における喫緊の共通課題ではなかっただろうか」(佐野, 2020: pp.18-19)として、モルトンらによる現代の視点からの帝国主義的展示批判を批判している。

佐野(2020)は、国際博覧会条約や博覧会国際事務局(BIE)の成立過程や、戦後最初の大規模万博である1958年ブリュッセル万博とその後の1967年モントリオール万博への歴史の流れについても論述している。1958年ブリュッセル万博は、戦後の万博ではあるが、「初期万博的世界」の残光が垣間見える、近代と現代という新旧共存の運営となっていたこと、また1967年モントリオール万博においては「『経済的弱小国(economically weak countries)』という表現を排し、新造語として『経済的発展途上国(economically developing countries)』という用語を導入する旨が、満場一致で議決され(中略)同じ会議において、『世界』の構成要員であるに

もかわらず、経済状況ゆえに個別のパビリオンを建設することのできないそれらの国々が共同で入居し、展示を行うためのパビリオン」(佐野, 2020: p.25)を「アフリカ広場 (Africa Place)」として実現させたことまで、万博史を綿密な史資料調査の末、紐解いた。

以上、博覧会における人類学展示及び娯楽性についての先行研究を概観した。吉見 (1992)、Stanard (2011)、佐野 (2020) 以外はいずれも戦前の営為を捉えた研究であり、その蓄積は注目に値するものの、そうした近代博覧会における人類学展示の歴史から、1970 年大阪万博への連続性・非連続性の研究については、その成果がほとんど見当たらない。

### Ⅲ. 日本の博覧会研究前史

次に本章では、日本の博覧会研究の蓄積がなされる以前、すなわち幕末から明治初期の博覧会に関する歴史的記述について主に検討する。日本においては、必ずしも研究の成果物とはいえないものを含めれば、博覧会に関する歴史的記述は、博覧会の開催準備や開催経験と対を成すように様々な媒体においてなされてきた。

まず、幕末から戦前期にかけては、視察で訪れたヨーロッパ事情の紹介や博覧会開催についての新聞記事、博覧会にかかる一般向け刊行物、博覧会関連の行政文書、博覧会開催の報告書など、多岐にわたる。そのうち、幕末の文久遣欧使節団の一員として渡欧した福澤諭吉による博覧会紹介は、福澤が幕末から明治期にかけて日本の近代化、とりわけ本稿の文脈では、博覧会開催にあたっての理論的バックボーンとして大きな影響力を持っていた蘭学者・啓蒙思想家であるという意味で、その内容をレビューすることには大きな意義があるといえる。

福澤諭吉は慶応 2 年 (1866 年) 刊行の『西洋事情 初編一』の中で、西洋近代の産物である「博物館」や「蒸気機関」などと並んで「博覧会」を紹介している。福澤が『西洋事情』で博覧会を紹介したのは訳がある。日本と万博の関わりは、文久 2 年 (1862 年)、遣欧使節団の第 2 回ロンドン万博視察に始まる。近代産業や科学技術の振興の媒体としての博覧会の存在に一行は大きな刺激を受け、そのときの様子を、使節団の一員であった福澤が紹介したのであった。

福澤は、「博物館」と「蒸気機関」の間に「博覧会」という項目を置いて、以下のように解説している。

前条の如く各國に博物館を設けて古来世界中の物品を集むと雖 [いえ] ども 諸邦の技芸工作 日に闢 [ひら] け 諸般の發明 随 [したが] っ て出 随て新なり之 [これ] が為 昔年は稀有の珍器と貴重せしもの方今に至ては陳腐に屬 [ぞく] し昨日の利器は今日の長物となること間々少なからず 故に西洋の大都會には數年毎に産物の大會を設け 世界中に布告して各々其國 [そのくに] の名産 便利の器械 古物奇品を集め

萬國 [ばんこく] の人に示すことあり 之を博覽會と稱 [しょう] す

そして、博覧会での展示内容を記した上で、その意義を次のようにまとめた。

博覽會は元 [もと] 相教へ相學ぶの趣意にて 互に他の所長を取て己の利となす 之を譬 [たと] へば智力工夫の交易を行うが如 [ごと] し 又各國古今の品物を見れば 其國の沿革 風俗 人物の智愚をも察知す可 [べ] きが故に 愚者は自から勵 [はげ] み 智者は自から戒め 以て世の文明を助くること少なからずと云う (福澤, 1866: 四三丁 - 四四丁, [ ] 内は筆者による補注)。

ここから読み取ることができるのは、社会進化論<sup>(1)</sup>の支持者であった福澤が (柿本, 2009: p.106)、博覧会をはじめとする自ら見聞した西洋近代文明を日本社会に紹介することによって、西洋近代から非西洋に対するまなざしを、そのまま日本に輸入し、後の脱亜入欧の社会的潮流のもと、日本から日本以外のアジアやその他の非西洋諸地域に対するまなざしへと転換することに結果的に貢献したということである。その際の有効な手段の一つとして、日本社会が博覧会というメディアを利用することを結果的に促すことになったといえる。こうした博覧会を通じた非西洋に対するまなざしの日本社会への移植は、19 世紀末から 20 世紀初頭に日本が参加した海外の万博におけるアイヌの人々の人類学展示や、1903 年に開催された第 5 回内国勸業博覧会での「學術人類館」における人類学展示につながっていった要因の一つといえるであろう。以上のような社会進化論的な思考と行動様式は、植民地主義や人種主義を正当化するものなどとして、現在では批判の対象となっているが、少なくとも『西洋事情』における「博覧会」の紹介が、当初博覧会というメディアに対する日本人一般のイメージ形成の基礎となり、現在でも日本人の博覧会に対するイメージに大きな影響を及ぼしているということはいえる。

ところで、椎名 (2005) によるとこの『西洋事情』は、当時「20 万～25 万部売れたとされているので、これにより博覧会の概念は、広くわが国の知識階級に浸透したものと考えられる。この『西洋事情』は明治の新時代になっても慶應義塾出版局から刊行を続けてい」たといい、『西洋事情』が当時の日本社会に及ぼした影響は絶大であったといえる (椎名, 2005: p.23)。

こうした背景のもと、明治初期に多くの国内博覧会が開催されたが、そのうち日本で初めて「博覧会」という語をイベント名に使用した京都博覧会においても、他の多くの博覧会同様、福澤による『西洋事情』の影響が見て取れる。以下、紹介する大槻喬編 (1937) と京都博覧協会編 (1903) による文献は、共に京都博覧会の沿革史であり研究の成果物ではない。しかし、福澤による『西洋事情』の影響を受けて開催された多くの博覧会の中でも京都の近代化に長年寄与した博覧



会についての文献であること、また後年多くの研究者がこれらの文献を頼りに京都博覧会の歴史研究を行っていること、以上2つの理由から本稿のレビュー文献として取り上げる。なお、1871年に刊行された京都博覧会社（のち京都博覧協会と改称）による『博覧会目録 全』も、開催当時の文献であることから引用対象とする。

1871年の京都博覧会の会期終了後、京都博覧会の会主（経営者）の3人によって和綴木版刷の『博覧会目録 全』（1871）が早々に編集・上梓された。この目録の序文は京都府参事で京都博覧会をはじめ京都近代化の推進者であった横村正直によって書かれている。横村は後に京都府知事になった人物である。この目録の末頁に添付された設立趣意書には、以下の文章が記載されている。

我邦〔わがくに〕最初の明治四年京都博覧會  
趣意書 寫〔うつし〕

博覧の會たるや人の智識を開くにあり、國の富強を輔〔たす〕くるに在り。故に廣〔ひろ〕く天産の奇物を集め人造の妙器を列す。是〔これ〕に由〔よ〕つて以〔もつ〕て發明開悟〔かいご〕することあらば半日の遊目〔ゆうもく〕も亦〔また〕十年の讀書〔どくしょ〕に勝り、一事の産業も終身の幸福を保つに足らん。仰ぎ冀〔こいねがわ〕くば天下善を好とするの家藏品を吝〔おし〕まずして之〔これ〕に加へ、有無交易の通義〔つうぎ〕を擴〔ひろ〕め、人と輿に善を爲〔な〕すの美事を挙げ玉へ。俯〔ふ〕して望むらくは四方業を勵〔はげ〕むの客遠來を憚〔はばか〕らずして之に臨み、現世經濟の公益を謀る利用厚生の急務を講じ玉はんことを。三月十日に始り四月晦日に畢〔おわ〕る五十日間、警衛を本府に請ふて豫〔あらかじ〕め災禍を意表に防ぎ、數萬里外告票を異域に發して將に讚評を宇内に索んとす。遠人必ず至らん、賣買の盛なる竝〔ならぶべきもの〕なし。新器果して出づべし、功夫の益甚だ多し、會場は本願、知恩、建仁の三寺、會主は三井小野熊谷の三名、謹んで趣意を表す。請ふ來り熟覽あれ。（京都博覧会社、1871: 末頁、〔 〕内は筆者による補注）

なお、以上の引用文とはほぼ同一の内容の文章が、大槻編の『京都博覧協會史畧』においても確認できる（大槻編、1937: pp.14-15）。

実際の出品物は、国内製品:166点（武具、古銭、古書画、珍石、古陶器の他、鹿の孕（はら）み子、両頭の蛇など縁日の見世物に等しいもの）、欧州製品:39点（当時神戸在住のフランス人シュリー、ドイツ人レイマン両氏の出品が大部分で、武官の剣、拳銃、汽車の模型、石油ランプ、ダチョウの卵など）、中国製品:131点（ほとんどが古銭、書画）の計336点と、庁堂（ちょうどう=大広間、表座敷）:22点、書院:17点の計39点（合計375点）であった（京都博覧会社、1871: 一丁 - 三五丁ほか）。以上紹介した出品物のうち、

特に日本や中国の出品物については、設立趣意書に「故に廣く天産の奇物を集め人造の妙器を列す」とあるため、機械製品などではなく自然標本や伝統品等を展示していたこと自体は主宰者も自覚していたことがわかる。しかし、同趣意書で高らかに謳いあげられた「人の智識を開くにあり、國の富強を輔くる」という博覧会の開催によって京都の近代化を図ろうとする理想からは大きくかけ離れた内容となっており、明治初期の「博覧会」は、それまで人々が慣れ親しんでいた、珍品・奇物などを来場者に見せる物産会や見世物などの延長線上にあったということが本文献からも確認できる。しかし、翌年から1928年まで形を変えつつほぼ毎年開催されることになる京都博覧会は、次第に京都の近代化にも寄与する内容へと変容していくこととなるのである。このことは、近代産業から後れを取っていた日本が殖産興業や富国強兵の掛け声のもと、急激に近代化を推し進め始めた最初期段階の、「博覧会」と称するイベントにおける伝統と近代の狭間の揺らぎを示している。次第に、国内博覧会という場は近代化を推し進める媒体として、また海外で開催される万博では伝統と近代を時に戦略的に、時に意図せずに表象していくこととなるのである。ただし、京都博覧会では、伝統産業の振興の場、また伝統と近代を融合する場としても機能していくことになるのは、明治政府主催の国内博覧会である内国勸業博覧会とは性格を異にしており、興味深い現象といえる。

ところで京都博覧会は、以下のように京都の文化や観光の振興にも寄与した。

現在毎年4月に京都で恒例の「都をどり」が開催されているが、この「都をどり」が、実は京都博覧会に関係していることは一般にはあまり知られていない。大槻編（1937）や京都博覧協会編（1903）によると、「都をどり」は、1871年に開催された京都博覧会の会期終了後の11月15日（旧暦）に、先述の有志らが設立した京都博覧会社によって、翌年の1872年に改めて第一回京都博覧会（会場：西本願寺、建仁寺、知恩院）と称する博覧会が開催された際の、「附博覧=余興」として創始されたものである（大槻編、1937: p.31; 京都博覧協会編、1903: pp.32-34）。

なお、図1は*The Illustrated London News*が1873年2月15日に発行した絵入り新聞で、前年に開催された第一回京都博覧会における「都をどり」が描かれている。

一方、同じく大槻編（1937）や京都博覧協会編（1903）によると、明治5年（1872年）3月10日から5月31日（旧暦）まで開催されたこの第1回京都博覧会の来場者数は、31,103人（一般）、7,531人（学校生徒・女紅場（にょこうば）生徒）、770人（外国人）であり、前年の京都博覧会の来場者数を大きく上回った。当時、外国人は「外国人遊歩規程」により、自由に行動できる範囲は、居留地とそこから十里（約40km）以内と定められていた。もし、外国人がこの遊歩区域外に出たい場合は、外務省に申請し「内地旅行免状」を



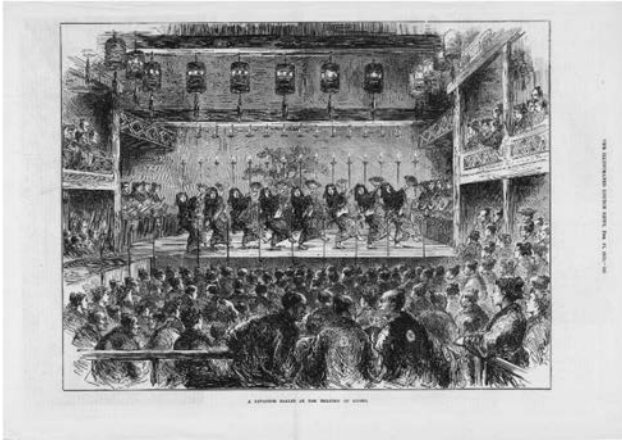


図1 A Japanese Ballet at the Theatre of Kyoto, *The Illustrated London News*, Feb. 15, 1873. (筆者蔵)



図2 第1回または第2回京都博覧会: 為博覧會入京之証 (筆者蔵)

発給してもらわなければならなかった。京都府は、外国人にも博覧会に来場してほしいと考えていたが、京都は大阪の川口外国人居留地から十里外に位置していた。そこで京都府は、海外の精巧な器物を出品してもらうことを目指し、博覧会期間中に限り外国人の入京を許可するよう政府に申請し許可を得たのである。そして、翌年以降の京都博覧会においてもこれと同様の措置が取られた(大槻編, 1937: pp.19-29; 京都博覧協会編, 1903: pp.8-30)。

こうした文化・観光の積極展開は、「都をどり」の踊り手や京都市中の人々を、外国人を含む多くの人々に見せようとする行為として、例えば、国内において日本人(和人)から他者と見なされたアイヌの人々が、海外の万博で見世物にされた(異文化表象)という歴史と外形的には類似している。その詳細な実態については調査を要するが、京都の場合は少なく

とも、京都の踊り手や市民を見せようとする行為(自文化表象)の範囲で考えることができ、むしろ東京遷都によって意気消沈していた京都政財界が、戦略の本質主義的な発想から京都を観光文化都市として再生させようとする営為として理解することができる。

#### IV. 日本における博覧会研究

本章では、これまでに検討した文献以外の日本における博覧会についての先行研究を見てみたい。

日本において、単発や単独の研究ではなく、共同研究というまとまった形で博覧会研究が行われるようになったのは1980年代のことである。それは、京都大学人文科学研究所の吉田光邦らによる共同研究「19世紀日本の情報と社会変動」(吉田編, 1985a)のテーマを濃密化させたケース・スタディとしての万博研究であった(吉田編, 1985b: p.1)。しかし、単発や単独の研究については、量は多くはないもののそれ以前からなされていた。以上の吉田による2文献も含めて時系列で整理すると以下ようになる。

- 永山定富『内外博覧会総説並に我国に於ける万国博覧会の問題』水明書院, 1933年
- 土屋喬雄『日本資本主義史上の指導者たち』岩波書店, 1939年
- 土屋喬雄編『G. ワグネル維新産業建設論策集成』北隆館, 1944年
- 春山行夫『万国博』筑摩書房, 1967年
- 山本光雄『日本博覧会史』理想社, 1970年
- 吉田光邦『万国博覧会——技術文明史的に』日本放送出版協会, 1970年
- 吉田光邦『改訂版 万国博覧会——技術文明史的に』日本放送出版協会, 1985年
- 吉田光邦編『19世紀日本の情報と社会変動——京都大学人文科学研究所研究報告』京都大学人文科学研究所, 1985a年
- 吉田光邦編『図説万国博覧会史 1851-1942』思文閣出版, 1985b年
- 吉田光邦編『万国博覧会の研究』思文閣出版, 1986年

これらの文献のうち、永山(博覧会実務家)の文献は、結果的に幻に終わった1940年の紀元2600年記念日本万国博覧会の開催を祈念して、また春山(詩人)、山本(博覧会実務家)、吉田(科学技術史研究者)の各文献については、1970年大阪万博や1985年の国際科学技術博覧会の開催前後であり、概ねその関連で刊行されたものといえる(永山, 1933: 緒言 p.4、春山, 1967: p.268、山本, 1970: p.4、吉田, 1985: p.238)。

博覧会について多くのページが割かれた研究者による論考

として最初期に位置づけられるのは、土屋（1939）と土屋編（1944）を著した土屋（経済学研究者）による論考であろう。土屋は1944年刊行の『G. ワグネル維新産業建設論策集成』の中で「維新政府の『富國強兵』・『殖産興業』の旗印の下に強行した産業建設は、その後における我國力の發展に貢献するところ甚大なるものであるが、その政策遂行に當って政府はその眼光と襟度を廣くし、採長、補短、泰西の新生産方法及び經濟制度の移植に力を盡したのであった。その採長補短には、若干の行過ぎもないではなかったであらうが、その方策の當時の情勢下における正しさは疑問の餘地はないであらう」（土屋編，1944：序 p.2）と述べており、最後は肯定的に締めくくっているものの、戦時下においては体制批判と受け止められかねない表現をしているのが興味深い。

また、吉田（1970）は、日本における博覧会研究の実情として「大学の研究室では直接の関係者でない限り、万国博が話題になることはほとんどない。いや、日本の現代の多くの知識人は意識的に万国博をとりあげ、それを問題にすることをさけようとしているようだ。（中略）それは日本のインテリたちの潜在的にもっている反体制の心理のなすわざだろう。万国博はもちろん現体制のなかで進行する事物だから」（吉田，1970：p.243）と述べており、1970年当時でも万博を研究対象とすることに対して否定的な考え方が強かったことがわかる。実際、1970年大阪万博開催前後の当時、現代博覧会についての出版物は、万博開催に携わった政治家、官僚、ジャーナリスト、博覧会実務家、アーティスト、建築家、デザイナー、小説家、評論家などによるものが主流であった。そしてその内容は、1851年から始まる万博の歴史や1970年大阪万博開催の舞台裏の紹介・体験談のほか、開催にあたっての行政文書や基本計画、啓発目的の一般向け刊行物などであり、開催から時間の経過と共に回想録的なものが登場する。研究者による本格的な1970年大阪万博を含む現代博覧会研究は、吉田（1970）など僅かにとどまった。

その後、概ね2000年代に入り、現代博覧会を含む研究についてはまだその層は厚くはないものの、以下のような文献が出されている。

時系列で紹介すると、前出の吉見俊哉『博覧会の政治学』（中央公論新社，1992年）のほか、吉見俊哉『万博幻想——戦後政治の呪縛』（筑摩書房，2005年）、榎木野衣『戦争と万博』（美術出版社，2005年）、暮沢剛巳・江藤光紀『大阪万博が演出した未来——前衛芸術の想像力とその時代』（青弓社，2014年）、川口幸也『戦後日本が夢見た世界——万国博美術展、原始美術、太陽の塔』（佐野真由子編『万国博覧会と人間の歴史』思文閣出版，2015年，pp.647-679）、新教出版社編集部編『現代のパベルの塔——反オリンピック・反万博』（新教出版社，2020年）などである。

いずれも、1970年大阪万博に関する批判的論考であるが、

戦前の博覧会と1970年大阪万博との連続性・非連続性を主題とした研究は見当たらない。また、博覧会という場における異文化接触について娯楽や観光を主題とした研究もほぼ皆無といっている。

ここまで博覧会における異文化接触と観光についての研究動向を確認してきたが、最後に一つの視点を指摘しておかなければならない。それは、いくらRydelが、エリート層から大衆層への思想の伝播を意図して開催された万博の場で、科学的裏付けに基づくとされた人種差別や帝国主義的な意図が大衆に伝達されていたのだと説こうが、吉見が博覧会について、「ナチズムとスターリニズムが正面から向きあい、またファシズムへの抗議の場ともなった1937年のパリ万博、空前のコマーシャルリズムの祭典となった39年のニューヨーク万博（中略）など、第2次世界大戦直前の世界では、様々な政治体制が、それぞれ自己の世界像に向けて大衆を動員していく有力な装置として、万国博覧会を開催ないし準備していった」（吉見，1992：p.220）と力説しようが、主催者や企画者側の意図、研究者による議論とは関係なく、大衆は博覧会を観光の対象としてまなざし、博覧会を訪問して娯楽に興じていたのである、という単純で、しかし重要な視点が多くの場合抜け落ちていることに気づかされるということである。裏返して論じると、博覧会研究は観光学研究そのものであるともいえ、観光学においてこれまで博覧会研究がさほどなされていなかったという批判も、一方で甘受しなければならないのである。

## V. おわりに

以上、本稿ではまず19世紀後半以降に人類学展示を行った近代博覧会についての研究について検討し、その後日本の博覧会研究前史として明治以降のいくつかの特筆すべき歴史的記述から、1970年までの博覧会についての論考を中心に、博覧会という舞台における異文化接触と娯楽性、すなわち観光行動に焦点を当て、その研究動向、もしくは連続性・非連続性についての文献の有無を確認してきた。このことで、人類学展示などの異文化接触を伴う博覧会から、戦後の研究者による博覧会の批判的論考に至るまでの歴史の断片を確認することができた。特に、戦前を中心とする近代博覧会における人類学展示などの異文化接触を伴う営為の博覧会間における影響関係や、その時々国際情勢・社会情勢などに基づく企画運営がなされてきた事実関係については既に多くの研究者による蓄積があることが確認できた。

しかし、近代博覧会から戦後の現代博覧会に向かう中で、戦後の万博がテーマ重視型に変容していった背景と経緯、また戦後の博覧会から1970年大阪万博へのつながり、特に異文化接触にまつわる影響関係についてはほとんど研究がなされていない。つまり、博覧会に関わる異文化接触や娯楽について、時代を超えて何が継承され、何が継承されていないのかといった連続性・非連続性の研究については、先行研究が



ごく限られているのである。松田（2003）が指摘するように、先行する博覧会が提示した『『言説——空間的な構成』そのものが、モジュールとして移転されるというよりは、むしろ社会的・歴史的な文脈の中で、先行する博覧会が提示したモジュールの影響を受けながらも、そのつど生成され続けるものである』（松田, 2003: pp.10-11）という指摘は重要である。つまり、博覧会の言説や空間的な構成物=モジュールが次世代の博覧会に脈々と引き継がれ続けるだけではなく、新たな博覧会が生成され続けるという指摘であり、戦前と戦後の博覧会の連続性・非連続性の問い方については、慎重を期すべきではある。しかし、1928年に国際博覧会条約が制定されたこともあり、博覧会の前後関係はまったく無視できるものではなく、なってきたのも一方で事実である。また、戦後から1960年代にかけての国際政治上の大きな変化、特に旧植民地諸国の独立や国際連合と戦後国際秩序の形成、それに伴う社会進化論の衰退と文化人類学の再生などを経て、博覧会国際事務局（BIE）も次第に万博の新たなステージを模索するようになったとも考えられる。よって、こうした文脈で博覧会の変化の連続性と非連続性を考察することには、そこから享受することが未だ多い大衆の視線、すなわち観光対象としての博覧会を理解する上でも意義があるといえる。

さらに、1970年大阪万博で設定された基本理念やテーマにはどのような意義があり、いかなる役割を果たしたのか、という同万博の本質に迫る問いに答える研究や、1970年大阪万博の来場者への基本理念やテーマの浸透度合いについての研究もほとんど見当たらない。

つまり、博覧会という舞台における異文化接触と娯楽——すなわち本稿の文脈では観光となる——のあり方の変化に関する研究が、概ね戦前と戦後で断絶しており、戦後については佐野（2020）の概説的研究など一部を除いては研究がなされていないのである。また、テーマ重視型を掲げた1970年大阪万博における来場者の異文化交流や異文化理解に関する意識変容の程度についての研究もなされていない。

よって、今後は以上指摘した領域の研究を進めることで、近代博覧会と現代博覧会の連続性・非連続性や、戦後の博覧会が果たした新たな役割について、明らかにすることとした<sup>(2)</sup>。

## 謝辞

原稿を注意深くお読み頂き適切な助言を頂いたことに対して、2人の匿名査読者および永井隼人編集委員長に感謝する。

また、尾久土正己先生からは論文の作成や修正にあたって多くの助言と援助を頂いた。ここに深く感謝する。

## 注

(1) 本稿では、「社会ダーウィニズム」や「文化進化論」などとも呼ば

れる思想を、より一般的な呼称である「社会進化論」としてまとめて呼称している。なお、本稿における「社会進化論」は、生物進化と社会進歩が類似していると見られていた19世紀後半以降の「相互競争」や「適者生存」という思想と連動した概念（バーナード, 2005: p.61）、また「野蛮で未開な、言い換えれば『文明』をもたない『劣等民族』を侵略・支配するイデオロギー」（岡倉, 1990: p.155）という文脈で用いている。

(2) 2025年に大阪・関西万博が開催されるにあたって、今後観光学においても万博に関連する論考が多くの研究者によってなされることが予想される。本レビューは、2025年大阪・関西万博における異文化・自文化表象と観光のあり方を巡る課題に対しても示唆を与え得る基礎研究であり、その意味で、史資料研究を基礎とする本レビューは、観光学研究に対しても一定の貢献を果たし得るといえる。

## 参考文献

- バーナード・アラン著、鈴木清史訳『人類学の歴史と理論』明石書店、2005年
- 崔銀姫『『観光アイヌ』とは何か——まなざしの歴史的な変容をめぐる』『社会情報学』1(2), 93-108, 2012年
- 福澤諭吉『博覧会』『西洋事情 初編 一』四三丁・四四丁・尚古堂、1866年
- Greenhalgh, P. *Ephemeral Vistas: The Expositions Universelles, Great Exhibitions and World's Fair, 1851-1939*. Manchester: Manchester University Press, 1988.
- 春山行夫『万国博』筑摩書房、1967年
- 伊藤真実子『明治日本と万国博覧会』吉川弘文館、2008年
- 柿本佳美『近代日本の優生学を受容と科学主義』『医療・生命と倫理・社会』8, 104-111, 2009年
- 小原真史『『人類館』の写真を読む』『photographers' gallery press』14, 3-55, 2019年
- 國雄行『博覧会と明治の日本』吉川弘文館、2010年
- 京都博覧会社『博覧会目録 全』1871年
- 京都博覧協会編『京都博覧会沿革誌』京都博覧協会、1903年
- MacKenzie J.M. *Propaganda and Empire: The Manipulation of British Public Opinion, 1880-1960*. Manchester: Manchester University Press, 1984.
- 松田京子『帝国の視線——博覧会と異文化表象』吉川弘文館、2003年
- 宮武公夫『海を渡ったアイヌ——先住民展示と二つの博覧会』岩波書店、2010年
- モルトン・パトリシア著、長谷川章訳『バリ植民地博覧会——オリエンタリズムの欲望と表象』星雲社、2002年
- 永山定富『内外博覧会総説並に我国に於ける万国博覧会の問題』水明書院、1933年
- 岡倉登志『『野蛮』の発見』講談社、1990年
- 大槻喬編『京都博覧協会史畧』京都博覧協会、1937年
- Rydeall R.W. *All the World's Fair: Visions of Empire at American International Expositions, 1876-1916*. Chicago and London: The University of Chicago Press, 1984.
- サイード E. W. 著、今沢紀子訳『オリエンタリズム 上・下』平凡社、1993年
- 佐野真由子「序説・万国博覧会という、世界を把握する方法」佐野真由子編『万博学——万国博覧会という、世界を把握する方法』3-43. 思文閣出版、2020年
- 椎名仙卓『日本博物館成立史——博覧会から博物館へ』雄山閣、2005年
- Stanard, M.G. *Selling the Congo: A History of European Pro-empire Prop-*

*agenda and the Making of Belgian Imperialism*. Lincoln and London: University of Nebraska Press, 2011.

土屋喬雄『日本資本主義史上の指導者たち』岩波書店, 1939 年

土屋喬雄編『G. ワグネル維新産業建設論策集成』北隆館, 1944 年

アーリ・ジョン, ラースン・ヨナス著, 加太宏邦訳『観光のまなざし〔増補改訂版〕』一般財団法人 法政大学出版局, 2014 年

山路勝彦『近代日本の植民地博覧会』風響社, 2008 年

山本光雄『日本博覧会史』理想社, 1970 年

安福恵美子「ツーリズムの社会的・文化的インパクト——ツーリストとホストの異文化接触を中心に」『異文化コミュニケーション研究』12.97-112, 2000 年

吉田憲司『文化の「発見」』岩波書店, 1999 年

吉田光邦『万国博覧会——技術文明史的に』日本放送出版協会, 1970 年

吉田光邦『改訂版 万国博覧会——技術文明史的に』日本放送出版協会, 1985 年

吉田光邦編『19 世紀日本の情報と社会変動——京都大学人文科学研究所研究報告』京都大学人文科学研究所, 1985 a 年

吉田光邦編『図説万国博覧会史 1851-1942』思文閣出版, 1985b 年

吉田光邦編『万国博覧会の研究』思文閣出版, 1986 年

吉見俊哉『博覧会の政治学』中央公論新社, 1992 年

受理日 2021 年 7 月 12 日